令和５年度
埼玉学園大学大学院
経営学研究科 FD 活動報告書

令和６年５月８日

経営学研究科

ＦＤ委員会

目次

1　はじめに..... 1
2　ＦＤ活動に関する基本方針..... 2
2‐1　ＦＤ委員会の委員構成..... 2
2‐2　ＦＤ委員会の開催日及び議題..... 2
3　経営学研究科教育体制..... 3
3‐1　教育方針（ポリシー）..... 3
3‐2　研究科長による３ポリシーの検証..... 5
3‐3　教育実施体制 7
3‐3‐1　専任教員 7
3‐3‐2　客員教員/兼担教員 7
3‐3‐3　担当授業科目・研究指導..... 8
3‐3‐4　カリキュラム 10
3‐3‐5　時間割表 12
3‐3‐6　院生数 13
3‐3‐7　研究題目一覧 13
3‐3‐8　履修状況 14
3‐3‐9　定期試験 15
4　授業アンケート・授業報告..... 16
4‐1　授業アンケート実施概要..... 16
4‐2　教員の授業報告..... 16
5　研究発表会及び意見交換会..... 35
5‐1　研究発表会 35
5‐2　大学院専任教員と大学院生による意見交換会..... 35
5‐3　大学院専任教員と客員教員による意見交換会..... 35
6　論文審査について..... 36
6‐1　修士論文中間報告会・構想発表会..... 36
6‐2　学位論文発表会及び最終試験..... 36
7　おわりに..... 37
参考資料１　埼玉学園大学大学院ＦＤ委員会規程..... 38
参考資料２　学生向け授業に関するアンケート実施のお願い..... 39
参考資料３　授業についてのアンケート（講義科目、研究指導科目）..... 40
参考資料４　教員の授業報告..... 41
参考資料５　中間報告会の振り返り..... 42

1　はじめに

埼玉学園大学の建学の精神である「自立と共生」の精神に基づき、課題に対して自立した解決能力を有し、他者と協働して社会的に共生する人材を育成すべく、大学院経営学研究科が平成 22 年４月に設置され、これまでの教職員一同の絶大なる努力と協力により、平成 24 年３月に第 1 回の修士課程修了生を輩出することができた。その後、本研究科の課程変更を行い、平成 25 年４月には博士後期課程が開設され、平成 28 年 3 月に第１回の博士後期課程修了生を輩出し、今年で、博士前期課程は 15 年目、博士後期課程は 12 年目となるが、その間、院生の学習意欲やニーズに応えると同時に、院生にとって満足のいく教育・指導を行うことが継続できている。

設置後初年度が終了した段階で、平成 22 年度埼玉学園大学大学院経営学研究科ＦＤ活動報告書を作成した。以後毎年ＦＤ委員会を中心に教育、研究の質的向上を目指し報告書を作成してきている。本報告書は、令和５年度における大学院教育が成功裏に行われたかどうかを検証し、もし不十分な点があれば早急に改善を図ることにより、同教育・研究をより充実したものにすべく、点検し、とりまとめ、報告するものである。

2　ＦＤ活動に関する基本方針

経営学研究科におけるＦＤ委員会の基本方針と役割、ＦＤ委員会規程については、当初の通りで変更はない。（参考資料１）

令和５年度のＦＤ委員会の構成員は、以下の通りである。

2-1　ＦＤ委員会の委員構成

委員等	所属・職名	氏名
委員長	ＦＤ委員長	一戸　真子
委　員	経営学研究科教授	大塚　浩記
委　員	経営学研究科教授	佐藤　正勝
委　員	経営学研究科教授	篠原　　淳
委　員	経営学研究科教授	反田　和成
委　員	経営学研究科教授	張　　英莉
委　員	経営学研究科教授	文　　智彦
委　員	経営学研究科准教授	工藤　悟志
委　員	経営学研究科非常勤講師	藤井　博義

2-2　ＦＤ委員会の開催日及び議題

令和５年度に開催された委員会の日時と議題は以下の通りである。

【令和５年度　ＦＤ委員会の開催日及び議題】

開催日	議題
令和５年 ６月 14 日	(1) 令和４年度ＦＤ活動報告書について
令和５年 ７月 12 日	(1) 令和５年度研究発表会の実施について (2) 令和５年度教育研究に関する意見交換会の実施について
令和５年 10 月 11 日	(1) 令和５年度研究発表会の報告について
令和６年 １月 10 日	(1) 令和５年度意見交換会の報告について
令和６年 ２月 14 日	(1) 令和６年度のＦＤ活動について

3　経営学研究科教育体制

3-1　教育方針（ポリシー）

経営学研究科の教育方針（ポリシー）は以下のとおりである。

【博士前期課程】

Ⅰ．卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

経営学研究科博士前期課程は、高い倫理観と学術的な研究能力を持ち、現実問題を論理的に分析し、独創的で的確な解答を出せる人材育成を目指し、修士論文の作成を通じて研究能力の育成を重視した研究指導をしています。

修士号を取得する要件は、大学院に2年間以上在学し、履修要件に定める授業科目を履修し、専門科目22単位以上、「研究指導Ⅰ」4単位、「研究指導Ⅱ」4単位の合計30単位以上修得して、修士論文の面接試験の最終試験に合格することが必要です。

修士論文の到達目標は、①当該テーマに関する学会の水準を踏まえていること、②当該分野に関する先行研究論文、資料等の文献を把握していること、③調査研究に関しては、調査の対象の範囲や分析が当該研究分野の水準に達していること、④問題の解決に際して、研究者の独自の論理、知見、発想が見られること、であり指導教員はこの到達目標を達成できるように論文指導を行うことにしています。

Ⅱ．教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

経営学研究科博士前期課程のカリキュラムは、経営学、会計学・税法学、金融論、リスク評価論の各学問分野の基本科目、理論科目、実務科目により編成しています。

高い専門性をもって経営・会計・税務・金融・リスク評価の知識を修得し、独創的で人間性豊かな高度専門職業人の育成を目指しています。このため、本研究科における研究指導は次のような特色を持っています。

①研究指導の方針は、研究を重視した質の高い修士論文作成を目指していること、②教育方法は、大学のアカデミズムと先端的な実務との融合により、自ら独創的な解答を得る自立した研究能力の育成、幅広い視野からの研究活動を行うよう指導していること、③自立した研究力を身につけるため2年間にわたり主指導教員1名･副指導教員1名の2名の教員から個別研究指導を継続して受ける体制を整えていること、④2年次の5月と11月に公開の修士論文の中間報告会を義務付け、幅広い参加者からの議論を通じて修士論文のブラッシュアップの機会を設けていること。

Ⅲ．入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

経営学研究科博士前期課程は、グローバリゼーション下での知識基盤型社会に対応する独創性・専門性・人間性を兼ね備えた高度専門職業人を目指す人を求めます。このため、以下の入学試験を行います。

①　一般選抜入学試験（一般学生・社会人・外国人留学生）

専門科目試験（経営学、会計学、金融論、税法から1科目を選択）と口述試験、書類選考で行います。受験生の専門基礎学力、研究能力及び修士論文作成のポテンシャリティを評価します。

②　学内選抜入学試験（本学の卒業を迎える学生を対象）

口述試験と書類選考で行います。受験生の専門基礎学力、研究能力及び修士論文作成のポテンシャリティ、在学中の学修等を評価します。

本研究科は、研究奨励目的に成績優秀な学生に、選考により最大2年間にわたり、返還のない奨学金制度を備えています。

【博士後期課程】

Ⅰ．卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

経営学研究科博士後期課程において、博士（経営学）の学位は、原則として 3 年以上在学し、所定の単位 12 単位を修得し、かつ必要な研究指導 6 単位を修得の上、博士論文を提出して、その審査及び最終試験に合格した者で、豊かな人間性と独創性を兼ね備えた自立した研究者としての研究能力を身につけている者に授与されます。

博士論文の到達目標は、その研究分野の学会の水準に貢献する、オリジナリティを有する学術論文であることです。

Ⅱ．教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

経営学研究科博士後期課程の教育課程は、アカデミズムと先端的な実務との融合により、自ら独創的な解答を得る自立した研究能力の育成、幅広い視野からの研究活動の実践という本学の教育理念に照らして、経営分野、会計・税務分野、金融分野、リスク評価分野の理論的な科目と実践的な科目をバランスよく設定しています。

教育目標は、博士前期課程の目標に加え、次代の地域企業経営及び我が国が抱えている現実的な経営問題に対応し、新しい企業経営を切り拓く高度な研究能力を持ち、豊かな人間性と独創性を兼ね備えた自立した研究者としての能力を身につけた高度専門職業人の育成です。具体的には、①地域の企業、病院経営等の事業組織の戦略の策定・実行できる高度専門人材、②経営学に関する自立した研究能力を備えた企業経営の海外進出のフロントランナー、③地域企業と共生して、企業の国際化や地場産業の発展のために貢献できる会計・財務・金融・リスク評価・税務のできる高度専門人材、④高度な専門性をもって、先端的な金融問題、リスク評価できる高度金融ビジネスマン、⑤幅広い専門性を修得し官民共同の政策立案に関与できる人材です。

このための教育方法の 1 つは、教育課程における学問分野の実務と理論を融合し、新しい知を創造する研究能力を身につけるため、3 年間にわたり、1 院生に対して主指導教員 1 人（専任教員）と副指導教員 1 人（客員教員含む）の 2 人の教員が「博士論文作成のための研究指導」を行います。その 2 つは、2・3 年次の 5 月に論文中間報告会を行い、広い学問分野からの質疑を受け、博士論文のブラッシュアップの機会を設けています。その 3 つは、2～3 年次に学術学会で報告し、所属の学術学会において自己の論文の学問的水準を認識し、その専門分野の学会水準を超えることを目標に研究指導するとともに、査読付き学会誌に投稿するよう指導します。その 4 つは、3 年次の 10 月末に博士論文の草稿を出し、公開報告会を行い、指導教員の博士論文の予備審査を受け、予備審査を合格した者が、最終修正した博士論文を提出することになります。

Ⅲ．入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

経営学研究科博士後期課程は、自立した研究能力をもってグローバリゼーション下での知識基盤型社会に対応する独創性・専門性・人間性を兼ね備えた高度専門職業人の養成を目標にしています。

入学試験は、原則として既に修士号を取得した社会人・一般学生・留学生を対象に、研究計画書、研究業績（修士論文を含む）及び面接により、博士論文のテーマに関しての問題意識の深さ、研究能力及び博士論文作成のポテンシャリティ等を評価します。

３-２　研究科長による３ポリシーの検証

【博士前期課程】

Ⅰ．卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

令和５年度においては、ディプロマ・ポリシーに明示されている、本研究科が求める修士論文に関する到達目標をクリアした１名の修了生が輩出された。研究テーマは、昨今国際共通課題となっている脱炭素問題を中心とする環境経営および環境会計に関するものであった。これまでの本研究科の傾向としては、博士前期課程については、税法や会計学に関する税理士試験の科目の一部免除を満たす論文が多く、一方で介護や環境といった昨今重要な課題に関するマネジメントに関するものと大別して２つに分けられる。どちらに関しても、適切かつ熱心な指導のもと、一定の水準に到達した優れた論文が提出されており、本年も同様の結果となった。今後は博士後期課程につながるよう、連続した研究能力の育成を可視化するため、さらには、今後は国際化も視野に入れ、学位の透明性の保証としての、ディプロマ・サプリメントの作成も引き続き検討していきたい。

Ⅱ．教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

令和５年度における修士論文作成者は１名であった。1 年次 4 名は各履修科目および研究指導Ⅰを、2 年次は研究指導Ⅱを中心に適切に履修し、カリキュラム・ポリシーに沿って教育課程が適切に展開された。また、修士論文作成については、埼玉学園大学大学院経営学研究科博士課程の研究指導及び学位に関する細則において詳細に定められており、研究指導方針に基づき、細則に則り、公開の修士論文中間報告会も実施し、幅広い参加者からの指導を多面的に受け、厳格かつ適正に審査が実施され合否の判定がなされた。

また、個々の授業科目については、授業における到達目標に照らし、教員による自己評価が実施されており、授業報告として科目ごとに適切な検証が行われた。

本研究科においては、経営分野・会計・税務分野、金融分野、リスク評価分野の 4 分野ごとにカリキュラムが構成されており、コース制を採用していないため、受講者は 4 分野から自らの関心のある専門科目を選択することができる。修了要件は、専門科目 22 単位以上、「研究指導Ⅰ」4 単位および「研究指導Ⅱ」4 単位の合計 30 単位以上を修得し、かつ修士論文を作成し、最終面接試験に合格することが要件とされているが、今後はそれぞれの専門科目によりどのような能力が修得され、保証されるかについてのカリキュラムツリーの作成も試みながら、すでにディプロマ・ポリシーにおいて述べたように、２つのニーズとマッチングするよう、検討する必要がある。

Ⅲ．入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

令和５年度入学者は４名であった。本学経済経営学部からの学内選抜者１名と一般選抜者３名の内訳である。今一度教育基本法における大学および大学院について確認しながら、本研究科におけるアドミッションポリシーについて検証してみたい。

教育基本法第７条「大学」は、次のように定義されている。「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」一方、同じく教育基本法第 99 条「大学院の目的」は以下のように定義されている。「大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。」さらに、専門職大学院については、「大学院のうち、学術の理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とするものは、専門職大学院とする。」本研究科は、専門職大学院ではないため、前者の役割を果たすことが求められている。つまり、今度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を修得した人材を世に送り出すことが大学院の目的と言える。言い換えると、大学院時代での深い学びが人類の進歩や文化の進展に寄与できるよう、困難な課題や諸問題についても論点整理し、解決までの方法を具体的に導き出せる人材を育成することが大学院の目的と言える。昨今の社会を取り巻く諸環境は、複雑多岐にわたっており、より高度な知識や専門性が求められていることは間違いない。本研究科のアドミッションポリシーに賛同した入学者が本研究科における修了時には、研究能力の向上はもとより、グローバル社会において、諸問題の解決のために、より一層活躍できるよう、具体的にどのような人材を求めるのかについて、アドミッションポリシーを明確化していくことが必要である。

上記の検証内容を踏まえ、令和６年度は、３ポリシーをより一層明確化するための検討を行う予定である。

【博士後期課程】

現在は履修者がいないため、アクティブな情報がなく、十分な検証ができない状況であるが、今後に向け、博士前期課程との関係性の検証を行いながら、３ポリシーの再構築をしていきたい。

3-3　教育実施体制

令和５年度は、専任教員及び客員教員を併せて、23 名の教員で授業・研究指導を行った。それぞれの詳細は、次の通りである。

3-3-1　専任教員

No.	氏名	職位
1	一戸　真子	研究科長
2	花崎　正晴	教　　授
3	大塚　浩記	教　　授
4	佐藤　正勝	教　　授
5	反田　和成	教　　授
6	張　　英莉	教　　授
7	福永　　肇	教　　授
8	文　　智彦	教　　授
9	藤井　大輔	教　　授
10	篠原　　淳	教　　授
11	工藤　悟志	准 教 授
12	秋場　勝彦	講　　師
13	松原　　優	講　　師

合計 13 名

3-3-2　客員教員/兼担教員

No.	氏名	職位
1	會田　耕児	客 員 教 授
2	香取　　稔	客 員 教 授
3	川原由紀人	客 員 教 授
4	鯖田　豊則	客 員 教 授
5	高橋　　均	客 員 教 授
6	冨家　友道	客 員 教 授
7	森田　　修	客 員 教 授
8	笠井　浩一	非常勤講師
9	藤井　博義	非常勤講師
10	劉　　博	非常勤講師

合計 10 名

3-3-3　担当授業科目・研究指導

各教員の担当授業は、以下の通りである。

埼玉学園大学大学院　経営学研究科経営学専攻博士前期課程　授業科目及び担当教員

科目区分	科目名	担当教員
経営分野	経営学特論	工藤　悟志
	経営組織論特論	文　　智彦
	医療経済特論	一戸　真子
	ヘルスケアサービス・マネジメント特論	一戸　真子
	労務管理特論	－
	地域企業論特論	反田　和成
	国際経営特論	工藤　悟志
	マーケティング特論	松原　　優
	経営史特論	張　　英莉
	アジア経済事情特論	張　　英莉
	会社法特論	高橋　　均
会　計・税務分野	財務会計特論	篠原　　淳
	管理会計特論	藤井　博義
	国際会計特論	篠原　　淳
	会計監査特論	笠井　浩一
	簿記特論	大塚　浩記
	経営財務特論	福永　　肇
	租税法特論	佐藤　正勝
	法人税法特論	川原由紀人
	所得税法特論	會田　耕児
	相続税法特論	香取　　稔
	消費税法特論	森田　　修
	国際租税法特論	佐藤　正勝
	環境会計特論	劉　　博
金融分野	金融論特論	花崎　正晴
	国際金融論特論	秋場　勝彦
	貨幣論特論	藤井　大輔
	証券市場特論	鯖田　豊則
リスク評価分野	リスク・マネジメント特論	冨家　友道
研究指導	研究指導Ⅰ・Ⅱ	一戸　真子/花崎　正晴/佐藤　正勝/反田　和成/張　　英莉/福永　　肇/文　　智彦/藤井　大輔/篠原　　淳/工藤　悟志/秋場　勝彦/松原　　優

埼玉学園大学大学院　経営学研究科経営学専攻博士後期課程　授業科目及び担当教員

科目区分	科目名	担当教員
経営分野	経営学特講	工藤　悟志
	経営組織論特講	文　　智彦
	ヘルスケアサービス・マネジメント特講	一戸　真子
	地域企業論特講	反田　和成
	国際経営特講	工藤　悟志
	経営史特講	張　　英莉
	マーケティング論特講	松原　　優
	労務管理特講	－
会　計・税務分野	財務会計特講	篠原　　淳
	管理会計特講	藤井　博義
	国際会計特講	篠原　　淳
	経営財務特講	福永　　肇
	租税法特講	佐藤　正勝
金融分野	貨幣論特講	藤井　大輔
	金融論特講	花崎　正晴
	国際金融論特講	秋場　勝彦
リスク評価分野	リスク・マネジメント特講	冨家　友道
研究指導	特別研究指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	一戸　真子/花崎　正晴/佐藤　正勝/反田　和成/張　　英莉/福永　　肇/文　　智彦/藤井　大輔/篠原　　淳/工藤　悟志/秋場　勝彦/松原　　優

3-3-4　カリキュラム

昨年度と同様、高度な専門性、独創性及び豊かな人間性を有すると同時に、高い経営能力と国際感覚を身に付け、地域企業に指導的な役割を果たしうる人材の養成を図るべく、以下のカリキュラム等で、教育・研究を行った。

【教育課程の概要　経営学研究科　博士前期課程】

学位又は称号	修士（経営学）	学位又は研究科の分野	経済学関係
卒業要件及び履修方法		授業時間等	
必修科目８単位を含め、30 単位以上を修得し、かつ、修士論文あるいは課題レポートを提出し、その審査及び最終試験に合格すること。		1 学年の学期区分	2 学期
		1 学期の授業期間	15 週
		1 時限の授業時間	90 分

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験実習
経営分野	経営学特論	1・2		2		○		
	経営組織論特論	1・2		2		○		
	医療経済特論	1・2		2		○		
	ヘルスケアサービス･マネジメント特論	1・2		2		○		
	労務管理特論	1・2		2		○		
	地域企業論特論	1・2		2		○		
	国際経営特論	1・2		2		○		
	マーケティング特論	1・2		2		○		
	経営史特論	1・2		2		○		
	アジア経済事情特論	1・2		2		○		
	会社法特論	1・2		2		○		
会計・税務分野	財務会計特論	1・2		2		○		
	管理会計特論	1・2		2		○		
	国際会計特論	1・2		2		○		
	会計監査特論	1・2		2		○		
	簿記特論	1・2		2		○		
	経営財務特論	1・2		2		○		
	租税法特論	1・2		2		○		
	法人税法特論	1・2		2		○		
	所得税法特論	1・2		2		○		
	相続税法特論	1・2		2		○		
	消費税法特論	1・2		2		○		
	国際租税法特論	1・2		2		○		
	環境会計特論	1・2		2		○		
金融分野	金融論特論	1・2		2		○		
	国際金融論特論	1・2		2		○		
	貨幣論特論	1・2		2		○		
	証券市場特論	1・2		2		○		
リスク評価分野	リスク・マネジメント特論	1・2		2		○		
研究指導	研究指導Ⅰ	1(通年)	4				○	
	研究指導Ⅱ	2(通年)	4				○	

【教育課程の概要　経営学研究科　博士後期課程】

学位又は称号	博士（経営学）	学位又は研究科の分野	経済学関係

卒業要件及び履修方法	授業時間等	
必修科目 6 単位を含め、12 単位以上を修得し、かつ、博士論文を提出し、その審査及び最終試験に合格すること。	1 学年の学期区分	2 学期
	1 学期の授業期間	15 週
	1 時限の授業時間	90 分

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験実習
経営分野	経営学特講	1・2・3		2		○		
	経営組織論特講	1・2・3		2		○		
	ヘルスケアサービス･マネジメント特講	1・2・3		2		○		
	地域企業論特講	1・2・3		2		○		
	国際経営特講	2・3		2		○		
	経営史特講	1・2・3		2		○		
	マーケティング論特講	1・2・3		2		○		
	労務管理特講	1・2・3		2		○		
会計・税務分野	財務会計特講	1・2・3		2		○		
	管理会計特講	1・2・3		2		○		
	国際会計特講	1・2・3		2		○		
	経営財務特講	1・2・3		2		○		
	租税法特講	1・2・3		2		○		
金融分野	貨幣論特講	1・2・3		2		○		
	金融論特講	1・2・3		2		○		
	国際金融論特講	1・2・3		2		○		
リスク評価分野	リスク・マネジメント特講	1・2・3		2		○		
研究指導	特別研究指導Ⅰ	1(通年)	2				○	
	特別研究指導Ⅱ	2(通年)	2				○	
	特別研究指導Ⅲ	3(通年)	2				○	

3 - 3 - 5　時間割表

令和５年度　埼玉学園大学大学院　経営学研究科時間割表

【春期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
１限 9：00 ～10：30										管理会計特論	藤井　博義	409			
２限 10：40 ～12：10	金融論特論	花崎　正晴	309				簿記特論	大塚　浩記	407	財務会計特論	篠原　　淳	409			
	地域企業論特論	反田　和成	310				医療経済特論	一戸　真子	研究室						
３限 13：00 ～14：30	研究指導Ⅱ	一戸　真子	309	経営学特論	工藤　悟志	309							経営史特論	張　　英莉	309
				研究指導Ⅰ	福永　　肇	409									
４限 14：40 ～16：10				経営財務特論	福永　　肇	409				所得税法特論	會田　耕児	406			
５限 16：20 ～17：50				証券市場特論	鯖田　豊則	310				マーケティング特論	松原　　優	309	相続税法特論	香取　　稔	309
６限 18：10 ～19：40	会社法特論	高橋　　均	309												
７限 19：45 ～21：15	租税法特論	佐藤　正勝	309												

※「研究指導Ⅰ・Ⅱ」、「特別研究指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

【秋期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
１限 9：00 ～10：30										環境会計特論	劉　　博	501			
２限 10：40 ～12：10							ヘルスケアサービス・ マネジメント特論	一戸　真子	505						
３限 13：00 ～14：30	研究指導Ⅱ	一戸　真子	309	国際経営特論	工藤　悟志	309							アジア経済事情特論	張　　英莉	309
	リスク・ マネジメント特論	冨家　友道	310												
４限 14：40 ～16：10															
５限 16：20 ～17：50										国際会計特論	篠原　　淳	309			
６限 18：10 ～19：40	国際租税法特論	佐藤　正勝	309	貨幣論特論	藤井　大輔	309	消費税法特論	森田　　修	309	会計監査特論	笠井　浩一	309	経営組織論特論	文　　智彦	309
７限 19：45 ～21：15	法人税法特論	川原由紀人	309	国際金融論特論	秋場　勝彦	309									

※「研究指導Ⅰ・Ⅱ」、「特別研究指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

3 - 3 - 6　院生数

今年度（令和５年５月１日現在）本学大学院に在籍する院生の詳細は、以下の通りである。

総数、入試形態別人数、年齢別人数、男女別人数

① 総　　数　８名

② 入試形態別人数（名）

	一般選抜	学内選抜
博士前期課程１年	3	1
博士前期課程２年	－	1
博士後期課程１年	－	－
博士後期課程２年	－	－
博士後期課程３年	－	－
合　　計	3	2

③ 年齢別人数（名）

	22～25(歳)	26～30(歳)	31～35(歳)	36～40(歳)	41～　(歳)
博士前期課程１年	1	－	1	1	1
博士前期課程２年	－	1	－	－	－
博士後期課程１年	－	－	－	－	－
博士後期課程２年	－	－	－	－	－
博士後期課程３年	－	－	－	－	－
合　　計	1	1	1	1	1

④ 男女別人数（名）

	男	女
博士前期課程１年	3	1
博士前期課程２年	－	1
博士後期課程１年	－	－
博士後期課程２年	－	－
博士後期課程３年	－	－
合　　計	3	2

3 - 3 - 7　研究題目一覧

＜博士前期課程１年＞

・交際費等における課税要件
・日本財政の基礎的財政収支（プライマリーバランス）の研究
・所得税法第 157 条における「不当に減少させる」の意義、成立要件の確立
・必要経費該当性の判断基準の確立

＜博士前期課程２年＞

・わが国の電力産業における環境保全活動に関する研究

3 - 3 - 8　履修状況

履修状況及び定期試験実施方法は、次の通りである。

博士前期課程　授業科目別人数

【春期】

科目名	担当教員	受講者数
医療経済特論	一戸　真子	1
マーケティング特論	松原　　優	3
会社法特論	高橋　　均	1
財務会計特論	篠原　　淳	4
管理会計特論	藤井　博義	4
簿記特論	大塚　浩記	1
経営財務特論	福永　　肇	2
租税法特論	佐藤　正勝	3
所得税法特論	會田　耕児	3
相続税法特論	香取　　稔	4
金融論特論	花崎　正晴	1
証券市場特論	鯖田　豊則	2

【秋期】

科目名	担当者	受講者数
ヘルスケアサービス･マネジメント特論	一戸　真子	1
国際経営特論	工藤　悟志	1
国際会計特論	篠原　　淳	2
会計監査特論	笠井　浩一	2
法人税法特論	川原由紀人	3
消費税法特論	森田　　修	2
国際租税法特論	佐藤　正勝	3
貨幣論特論	藤井　大輔	1

【通年】

科目名	担当者	受講者数
研究指導Ⅰ	佐藤　正勝	3
	福永　　肇	1
研究指導Ⅱ	一戸　真子	1

博士後期課程　授業科目別人数

【春期】【秋期】【通年】　実施対象科目無し

3 - 3 - 9　定期試験

博士前期課程

【春期】

筆記

No.	科目名	担当
1	簿記特論	大塚　浩記

レポート

No.	科目名	担当
1	医療経済特論	一戸　真子
2	マーケティング特論	松原　　優
3	会社法特論	高橋　　均
4	財務会計特論	篠原　　淳
5	管理会計特論	藤井　博義
6	経営財務特論	福永　　肇
7	租税法特論	佐藤　正勝
8	所得税法特論	會田　耕児
9	相続税法特論	香取　　稔
10	金融論特論	花崎　正晴
11	証券市場特論	鯖田　豊則

【秋期】

筆記

No.	科目名	担当
1	会計監査特論	笠井　浩一

レポート

No.	科目名	担当
1	ヘルスケアサービス・マネジメント特論	一戸　真子
2	国際経営特論	工藤　悟志
3	国際会計特論	篠原　　淳
4	法人税法特論	川原由紀人
5	消費税法特論	森田　　修
6	国際租税法特論	佐藤　正勝
7	貨幣論特論	藤井　大輔

博士後期課程

実施対象科目無し

4　授業アンケート・授業報告

4-1　授業アンケート実施概要

令和５年度春期における授業を対象として７月に、秋期における授業を対象として 12 月に、院生への授業アンケートを実施した。対象科目は２名以上の講義科目である。

実施時期

春学期：令和５年６月 26 日（月）～ ７月７日（金）

秋学期：令和５年 12 月４日（月）～ 12 月 15 日（金）

実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配布（参考資料２、３）、実施した。回答形式は、設問に対する自由記述式としている。今年度秋期より、回答用紙の回収については、Forms を用いて回収し、事務に提出することとした。

回答学生数

春学期：アンケート回収数 25／履修者数（延べ人数）25　（回収率 100%）

秋学期：アンケート回収数 10／履修者数（延べ人数）12　（回収率 83%）

実施結果

結果は次項からの記載内容の通りであるが、全般的にきわめて満足のいく結果を得ることができた。授業アンケート用紙は参考資料として掲載している。

4-2　教員の授業報告

教員の授業報告は、担当した科目ごとについての教員による自己評価を行ったものである。

4 - 2　教員の授業報告

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　一戸　真子

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
医療経済特論	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・医療サービスの特殊性と経済の関係について説明できる。 ・医療技術評価の世界的潮流について理解できる。 ・診療報酬のあり方を含め、医療サービスとコストとの関係を理解できる。 ・アウトカムと経済性について理解を深める。	受講者は１名であったが、大変熱心な受講生であり、講義を進めやすかった。本人の修士論文テーマとの関連性が低いため、できるだけ本人の本科目への理解度を確認しながら、ディスカッションを多く取り入れ、関心を高められるよう工夫した。
ヘルスケアサービス・マネジメント特論	秋期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・ヘルスケアサービスの特徴と質について説明できる。 ・医療・介護経営における重要な各要素について説明できる。 ・ベスト・プラクティスのために求められる視点について分析できる。 ・健康・保健・医療・介護・福祉分野におけるマネジメントのあり方について考察できる。	受講者は１名であったが、学部時代にヘルスケアサービスマネジメント科目を受講していたため、基礎的知識があり、授業の展開がしやすかった。またディスカッションも多く取り入れながら、できるだけ色々と考え、授業内容について、自分なりの意見を持てるように指導を行った。特に一人のヘルスケアサービスコンシューマとして、どのようなことが質の保証に重要であるかについて理解を深められるよう工夫した。
研究指導Ⅱ	秋期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・論文執筆までの一連のプロセスを理解できる ・論文執筆のために必要なスキルを身に付ける。	退職した教員を引き継ぐ形での研究指導Ⅱであったため、論文完成まで 1 年という短い期間であることより、スピードアップしながら指導を行った。論文執筆指導はもとより、できるだけ、院生本人との信頼関係の構築に努め、また本人のモチベーションの維持と書き上げられると思える自信を保持できるよう徹底したサポートを行った。

教員の授業報告

経営学研究科
職名　講師
氏名　松原　優

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
マーケティング特論	春期	3	1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・学部生の時に学んだことがなかったため。 ・マーケティング全般の知識を習得するため。 ・マーケティングに興味があったため。 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・ディスカッションの経験を詰むことができてよかった。 ・企業の事例から、経営判断などを学ぶことができた 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・とても満足できた（複数回答 4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特にありません（複数回答)。	本講義は、大学院で経営学を学ぶ大学院生に向けて開講した科目であり、修士の学位を取得する上で必須となるマーケティングに関する基礎から応用にかけての知識獲得を目指した。その中で、履修者が全員実務に携わっている特徴を活かし、各回で各自の経験と理論を紐付けるような議論を行った。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　高橋　　均

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
会社法特論	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・株式会社を巡る法制度を理解するとともに、企業買収や資金調達等の具体的な事象に対して、会社法の具体的な適用について、裁判例も踏まえながら理解を深めることができる ・大学院生として相応しい理論的な思考を身につける（リーガルマインド）	1. 当該授業の履修の意義と到達目標 ビジネスを行う上での基本法である会社法は、法学部出身の学生に限らず、社会人として、一度は体系的に学修しておく意義がある科目です。 授業の到達目標としては、① 株式会社を巡る法制度を理解するとともに、企業買収や企業不祥事等の具体的な事象に対して、会社法の具体的な適用について、裁判例も踏まえながら理解を深めることができること、② 大学院生として相応しい理論的な思考を身につけること（リーガルマインド）、としました。 ２. 授業を行うにつき心掛けたこと・工夫したこと 単に、会社法の制度論ではなく、実務に応用できる視点を心掛けました。具体的には、①立法趣旨を丁寧に説明、②具体的な事例問題を通して具体的に考える、③マスメディアで報道されているような事案（M＆A、不祥事等）を説明に極力取り込む、④ＤＶＤの鑑賞及びそれを踏まえて自分の意見を説明する、などの工夫を行いました。 ３. 授業の進め方 今学期は、履修生が一人であったので、完全マンツーマンの授業を行いました。履修生も、欠席・遅刻もなく、全ての授業に出席・参加しました。 毎回、質疑を取り入れ、理解の程度に応じて解説に濃淡をつけました。また、履修生も積極的な参加を通じて、リーガルマインドについての考えを身につくことができたと評価します（質疑内容、及びレポートの結果より判断）。

教員の授業報告

経営学研究科
職名　教授
氏名　篠原　　淳

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
財務会計特論	春期	4	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・過去に財務会計について学習していたことがあったため。 ・日本と海外の財務会計の違いを習得するため。 ・修士論文の研究テーマと近い分野だから。 ・財務会計の知識を深めるため。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・自分なりの意見をまとめたり、文章の書き方について学べた。 ・「「IFRS」」を中心に違いを把握できた。 ・会計の知識を再確認することができ ・現行の会計基準と、今までのを変遷を知り、研究でも 最新の情報を調べるきっかけになりました。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足です（複数回答） ・法律と照らし合わせて理解する機会になった。 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし。（複数回答）	財務会計の基礎知識をある程度有する履修者を対象として、応用力を磨いてもらうために、各自にレジメによる発表をしてもらい、その内容について解説を行うとともに、院生の意見を吸い上げる形で、諸事項について考える習慣を身についけられるように授業を進行しました。 院生には、上記なような授業進行を通して、より深い理解を意識させることがでしたと思います。
国際会計特論	秋期	2	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・春期で財務会計特論を受講しより理解を深めたかったため ・仕事に会計の知識を使うため 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・税法の論文にも関係ある部分があり役に立ちました ・普段何気なく使っている会計の知識を改めて再確認できました 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた（複数回答） 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	会計と税務の隣接関係を意識させる形で実務等にも将来役立つ内容を講義することを心掛けた。 単なる講義ではなく、受講生が報告できる形を設けた上で、報告内容における論点について、考えてもらう形で質問するような形の講義形式も取り入れた。 修士論文を進めていく上で役立ちうる基礎知識を提供できるように注力した。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　非常勤講師
氏　名　藤井　博義

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
管理会計特論	春期	4	１. この授業を履修した理由は何ですか。 ・管理会計全般の徹底を理解するため。 ・管理会計に興味があったため。（複数回答） ２. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・予算管理の考え方等とても参考になった。 ・具体的な事例が記載している本を題材にして議論することができた。 ・研究するうえで、学問と実際行われている事象を結び付けて考える癖が身についた。 ３. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できました（複数回答）。 ４. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特にありません（複数回答）。	本授業は、管理会計の基礎的な知識の修得を目的としている。講義を進めるにあたり、ただ単にテクニカルな側面だけを学ぶのではなく、なぜ管理会計の各技法が必要となったのか、その背景を歴史期的な観点から理解することも意識した。また、できるだけケーススタディも混えながら、受講生とのディスカッションを行うことで、受講生の理解が深まるよう工夫した。講義のなかで、受講生からも多くの発言が出て、活発な議論が展開されたことから、ある程度目的が達成されたと考える。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　大塚　浩記

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
簿記特論	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・財務諸表の構成要素について，基本的な簿記処理が理解できる。	本年度は，受講者が１名だったため，その受講者に合わせた内容及び進度で授業が展開できた。また，合格してから時間が経過しているものの，税理士試験科目の簿記論と財務諸表論の合格者であり，簿記処理に関する習熟度が高かったため，ある簿記処理に関して，その背後にある理論的背景を含めた説明と，受講者が実務で経験した事例の紹介とを交えた対話形式の授業を心がけた。この意味で授業目標は達成できたと考えている。受講者の税務中心の実務に対しては直接役立たないかもしれなかったが，何かの判断の際の参考として思い出してもらえることを期待している。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　佐藤　正勝

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
租税法特論	春期	3	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・修士論文のテーマに関連するため。 ・税法の論文を提出するため。 ・情報の成立などを習得するため。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・租税法について学ぶことができた。 ・租税論文を作成するための基礎を学べました。 ・条文の考え方などとても参考になった。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた（複数回答） 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	1　履修生全員が、修士論文を国税審議会に提出し、税理士試験の免除を受ける予定である。したがって、国税審議会の審査に合格するだけの、質の高い論文を完成させる必要がある。 2　そこで、まず、3名とも、租税法を学ぶのは、ほぼ初めてであるので、基礎を講義した。3名の評価は、「基礎を学べた」とあるので、講義の評価はまずまずであったと思われる。 3　次に、この授業で特に力をいれたのは、証明方法の理論、具体的材料の分析の仕方、収集方法、記述方法、論理展開の方法などである。その理由は、国税審議会に提出する論文の合格を目指す必要があるからである。このため、高度の論文作成のための詳細なテキストを用意し、講義した。 4　この点について、3人の評価をみると、「満足した」旨の記述があることから、まずまずの講義であったと思われる。
国際租税法特論	秋期	3	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・将来的に仕事で国際的な税の知識が必要になるため ・実務に直結するため、より理論を深めたかったから 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・国際租税法の知識について、体系的に学ぶことができました ・実務において、幅広い視野から顧問先に説明できるようになった 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・とても満足しています（複数回答） 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	1　心がけてきたこと 国際租税法は、複雑な内容である点に、その特徴がある。その理由は、国内税法の規定と租税条約等の国際的な規定とが絡み合っている分野だからである。 2　改善・工夫したこと したがって、単に説明することにとどまらず、図解、事例等を多用することによって、理解を容易にするよう心がけており、実際上そのような独自テキストを作成して、講義に用いている。 3　特筆すべき事項 複雑な内容を履修生に理解してもらうためには、履修生が、講義内容を、具体的な例にまで、落とし込むところまで理解を求めている。そこで、具体的な事例を履修生自身に作成させるという形のレポートを課すことによって、具体的事例のレベルまでの理解を促すとともに、提出されたレポートの内容をチェックして、履修生の理解度を把握することにしている。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　佐藤　正勝

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
研究指導Ⅰ	秋期	3	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・税法論文を書くため 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・税法論文を書くための基礎知識を学べました 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・とても満足しています 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし	研究指導Ⅰは、修士論文を指導する科目である。修士論文は、個々の履修生が、租税法特論の講義で説明した講義内容に従って、自分自身で作成し、教員からコメントをもらう形で進める科目である。したがって、講義内容の十分な理解をまずは進めること、その理解に基づいて、論文作成を実行すること、が重要であることを指導している。 1年次に、2年間の講義科目の全てを履修する履修生の場合は、研究指導Ⅰの(1年次の)1年間は、修士論文の作成範囲は、抑え気味になる。逆にいうならば、2年次こそは、修士論文（研究指導Ⅱという科目1科目）のみとなるので、修士論文の指導という観点からは、本格的な作成時期となる。 そこで、履修生には、研究指導Ⅰの場合は、序論や第一章前後の進捗が実現されれば、2 年次での修士論文完成が見えてくる旨、伝えている。そして、実際上、本年度の研究指導Ⅰの 1 年間の成果を見てみると、履修生全員、前述の範囲がほぼ実現されていたことが確認できた。したがって、研究指導Ⅰの授業の結果は、良好であると評価できるし、履修生からも、左の欄のアンケート内容どおり、「満足である」旨の回答がでていることで、そのことを確認することができた。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　會田　耕児

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
所得税法特論	春期	3	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・税法論文を書くため、それに関連する所得税の授業を選択した。 ・条文等の理解を深めるため。 ・修士論文の研究テーマが税法に関することだったため。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・税法上の取扱いについて、根拠条文に遡って確認することにより所得税に対する理解が深まった。 ・実務上、普段より条文等を引いていなかったため、条文のたてつけなど 勉強になった。 ・税法を条文から見ることで、実務で学ぶこと以上に解釈を深めることができた。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・日常生活において、所得税の条文を確認することがない為、授業の中でそれを行うことができ、とても有意義でした。 ・知らないことを知れ、法律の読み方、考え方を学ぶことができ、満足している。 ・満足です 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特にありません。（複数回答）	・ 所得税法について、条文を通じて理解することを第一の目標とした。 ・ このため、条文が言わんとしていること、理由、考え方をできる限り平易な表現で解説するとともに、様々な判例に触れることにより、解釈や適用に様々な考え方があることを紹介し、所得税法への理解が深まるよう心掛けた。 ・ また、講義の中では、随時、学生に質問し、その答えを聞いて理解度を図り、必要な補足を加えた。 ・ 学生は、初めのうちは、質問されると経験や感覚で回答していたが、講義後半には、条文を見ながら答えを探すようになっており、当初の目標を達成することができたと考えている。 ・ なお、一般的な決算書や確定申告書の作成に関する目標については、学生３人が会計事務所の所員であるため、特に教えるべきことはなかった。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　香取　　稔

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
相続税法特論	春期	4	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・相続税全般の知識を習得するため。 ・相続税に興味があり、学びたいと思ったから。 ・側族税に関する知識を深めるため。 ・修士論文のテーマに隣接する分野であるため。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・仕事上必須のため、大変参考になった。 ・授業におけるレジュメの質量が充実しており、相続税に対する理解を深めることができた。 ・修士論文を書くうえでの条文の解釈などを学ぶことができた。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・実務的な内容も多かったので満足できた。 ・満足できた。 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	相続税法の基礎的知識の習得のみならず、実務における課題の解決方法を身に着けさせることを目的として、基礎的なところは、条文等を参照しながら説明形式で講義を進める一方、理解を深めてもらいたい点は、裁判例等の参考資料を配布の上、事例等を解かせ、結論に至る過程について討議形式で講義を進めた。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　花崎　正晴

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
金融論特論	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・企業金融、コーポレート・ガバナンス、金融危機、金融規制などの分野で、理論や実証分析に関する代表的な先行研究を理解できる。 ・同分野で、オリジナルな分析ができる。	この授業では、企業金融の基礎理論であるモジリアーニ・ミラー理論を正しく理解するとともに、現実の世界と対比することによって、企業金融の問題を多面的に講義した。また、各種のコーポレート・ガバナンスの問題や金融危機および金融システムの問題にも理論と現実の両面からアプローチした。 このようにこの授業では、金融に関する理論と現実の世界とを対比することによって、各種の問題をレクチャーすることを心掛けた。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　鯖田　豊則

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
証券市場特論	春期	2	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・証券の知識が乏しく、身に着けたいと思ったため。 ・金融投資全般の知識を習得するため。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・幅広い分野に触れ、多角的なものの見方を得られたので、より完成度の高い論文を書くことができると思う。 ・投資関連の知識は、仕事上必要であったのでとても参考になった。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足した。証券市場の仕組みから、実際の商品での考え方を知れた。 ・株式投資の実務的な経験などの話が聞けたので有意義でした。 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	昨年度から担当しているが、昨年度は履修者がいなくて、今年度が初めての開講となった。大学院修士課程の講義科目で、履修者が２名。内訳は社会人１名と、学部卒業後そのまま大学院に進学した１名。そのため、証券市場、あるいは金融市場に対するこれまでの知見が異なっていると考えて、なるべく、履修者各人が、興味を持っているテーマを中心に講義を行ってきた。また、証券市場や金融市場は、国内景気にとどまらず、世界経済の動きを反映する場であり、インターネットなど、最新のＩＴ技術の発展を反映した市場取引も行われるため、証券会社が毎月発行している証券市場のレポートを実際に読んでもらって、それぞれの意見を出し合って、討論する時間も授業の中で設けた。受講者の満足度を向上させることができたと考えている。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　非常勤講師
氏　名　笠井　浩一

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
会計監査特論	秋期	2	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・会計監査に興味があったため 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・会計監査の具体的な実務内容についても説明頂き、とても興味深い内容でした 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足しています 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし	公認会計士試験の試験科目としての監査論をベースに講義を展開することによりその基礎となる知識が習得されるように配慮した。 また、会計監査が実際にどのような手続きで行われているか、会計監査の流れ・手続を現場レベルで具体的に解説することで、実務で行われていることがわかるようにした。 理論的な面では、会計監査がどのような社会的意義を有しているかを会計監査の歴史を学ぶことによって理解してもらうこと、会計監査の社会的な役割について現在の会計監査の制度や会計監査に対する社会的役割期待・期待ギャップ等を学ぶことによって理解してもらうことを心掛けた。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　森田　　修

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
消費税法特論	秋期	2	1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・税法の修士論文作成の参考になるため ・実務に直結する科目であるため、より理論を深めたかったから 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・税法解釈の参考になった ・実務において、幅広い視野から顧問先に説明できるようになった 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた（複数回答） 4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	1　日本の財政における消費税の重要性を理解してもらうため、第１回目の講義において、消費税が導入されるまでの日本の財政事情や経済情勢を解説するとともに、導入時の制度が形作られた理由を詳細に解説した。 2　導入後にどのような課題が生じ、それに対してどのような改正がなされたのかを時系列で解説し、消費税の根本を理解させるように努めた。 3　法律や通達の条文を確認させながら、法律の読み方の具体的なルールを学ばせるとともに、制定に至るまでの手続等についても解説した。 4　自身の経験を活かし、実務的な取扱いについても具体的な事例に基づいて解説した。特にインボイス制度については、税理士として実務を行っていく上で、有用となる知識を身に付けさせるように努めた。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　客員教授
氏　名　川原由紀人

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
法人税法特論	秋期	3	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・税法の修士論文作成のため ・実務でよく使う税法のため 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・税法の勉強に参考になった ・判例を具体的に検討したり、条文を引いて勉強したりと、法人税法に関する理解を深めることができました 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた（複数回答） 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	改正、判決、裁決等最新のトピックスを随時折り込むよう努め、ある程度達成できたと思うが、その一方で、講義時間が不足し、最後の方は、はしょった説明になってしまった。 今後は、最新のトピックスとのバランスを見て、要点を絞った講義内容に努めることとしたい。

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名　教授
氏　名　藤井　大輔

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
貨幣論特論	秋期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・本講義では通貨問題を中心に、博士前期における研究を深化させ博士論文作成のための高度な思考と分析力を養い、独創性ある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。	この科目の到達目標は90%程度到達できたと自己評価する。 履修生が１名であったため、履修生の思考を深めたい、学識を得たいという学修の要望に応じて、毎回テキストの章単位で内容の要約を作成させ、講読を通じた貨幣に関する博士前期課程レベルの思考・分析力の涵養に努めた。 事実上のマンツーマン授業であったため、対話を通じた思考力の深化や貨幣に関する学識の習得が手に取るように感じられた。 また、テキスト内容の要約により、「研究畑」でなくとも広く社会一般で求められる「まとめる力」も、履修生が自ら取り組むことで養われた点がよかった。 次年度以後は、履修生の履修後の社会生活も踏まえた、きめ細かな講義パターンを作成しておき、柔軟に対応できるようにしたい。

教員の授業報告

経営学研究科
職名　教授
氏名　福永　肇

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
研究指導Ⅰ	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・研究テーマを明確にし、基本文献を読み、修士論文作成に着手。研究、論文執筆を進める。	大学院進学当初は研究テーマが未確定の状況であったが、研究テーマは人口データ分析に決まり、研究の進捗も順調であり、確りとした修士論文が期待できる。 １．受講院生は１名で大学学部からの進学者。大学院入試受験時に予定していた教員が退職したため、入学後に、福永が主指導教員になることになった。 ２．入試時点では学部卒論テーマの「環境会計」をより深めていく研究を予定していた。しかし環境会計の教員が退職したため、研究テーマに関しては一旦、白紙に戻し、経済学、経営学の全般から選択し直すことになった。大学院では最初に経済学、経営学、会計学の体系を教え、理解させた。 ３．学会という世界を理解するために、院生には「日本経済学会」に新規加入してもらい、9月に開催された学術大会（於：関西大学）に参加させた（院生の学会発表はなし） ４．院生は大学院終了後、コンサルティング業界を進路希望としていることより米国ビジネススクールのMBAコースで教える「ロジカル・シンキング」メソッドを教授し、取得させた。 ５．学術論文の作成基礎について、教授ずみ、 ６．最終的に、「(仮称) 日本の年齢3区分別の人口データ分析（1920～2020年)」をマスターペーパーのテーマに絞り、令和5年秋期内に、データ収集と基礎データファイルを作成する。この研究からは日本初となる新規の視点・手法が2つ呈示できる。M2ではこのデータを解析・研究して論文にし、日本の人口学に新たな視点と見解を呈示する予定である。

教員の授業報告

経営学研究科
職名　教授
氏名　福永　肇

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
経営財務特論	春期	2	1.この授業を履修した理由は何ですか。 ・金融機関の役割や、資金の調達方法の知識を学ぶため。 ・病院の経営に興味を抱いていたから。 2.この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・仕事上、資金練りの相談も多々ある中で、より具体的に話ができるようになった。 ・ファイナンスに関しての全体像を掴むことができたので、これからの勉強の理解が深まった。 3.全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・金融機関側に立った実務上のお話などとても参考になった。 ・病院における資金繰りや調達方法を知れ、満足した。 4.この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし（複数回答）	1．受講生は2名。税理士を目指す社会人院生と、学部から進学した院生。 2．拙著『病院ファイナンス』。日本医療企画、2000年刊をテキストに使い、ファイナンスの基礎を全て教授。 3．ファイナンスの現場、実務を享受できる大学院は日本では稀有なので、世界の、日本のファイナンスの現場、現実、現物の理解に主眼をおいた。 4．他では教わることの出来ない高度な内容の講義を行ったが、噛み砕いて解説したので、院生は十分に理解することができたと判断する。

5　研究発表会及び意見交換会

例年、大学院担当教員相互の研究交流を図るとともに、学生及び客員教員との意見交換の場を設け、今後の大学院の教育研究活動の活性化に資することを目的として以下の研究発表会及び意見交換会を実施している。

5-1　研究発表会

日　　時：令和５年９月 13 日(水)　11：00～12：00（講演 40 分、質疑応答 20 分）
場　　所：埼玉学園大学３号館　501 教室
参加者数：専任教員 10 名、大学院生３名　合計 13 名
内　　容：　発表者：藤井 大輔　経営学研究科　教授
　　テーマ：「幹在直通貨物列車（貨物版ミニ新幹線）導入可能性の検討
　　～北海道新幹線を検討対象として～」

5-2　大学院専任教員と大学院生による意見交換会

日　　時：令和５年 11 月 22 日(水)　15：00～15：40
場　　所：埼玉学園大学３号館　４階　412 教室
参加者数：専任教員 12 名、大学院生３名　合計 15 名
内　　容：

院生からの主な意見

・各先生方の指導が大変熱心で、授業には満足している。
・大学院卒の就職活動情報について、もう少しキャリアセンターで支援してもらいたい。

教員からの主な意見

・院生時代を振り返ってみると、楽しいことがまず大切であることを実感している。論文作成等などつらいこともあるかと思われるが、できるだけ院生生活を楽しむように。
・できるだけ 1 年次に授業単位を取りきって、2 年次には修士論文作成に専念できるよう、計画的に進めていただきたい。

5-3　大学院専任教員と客員教員による意見交換会

日　　時：令和５年 11 月 22 日(水)　15：40～16：10
場　　所：埼玉学園大学３号館　４階　412 教室
参加者数：専任教員 12 名、合計 12 名
内　　容：

主な意見

・本学は OB との関係や先輩後輩との関係などの縦の関係が希薄であるので、もう少し工夫すべきではないだろうか。
・学部からの進学生と社会人の双方のニーズを満たす大学院のあり方について検討していくことが必要である。

〈成　果〉

課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の提示についての基本的な考え方の確認等、活発な情報交換がなされ、それぞれの場面での方策について、よりよいあり方を検討することができている。今後も定期的に継続していく予定である。

6　論文審査について

本大学院経営学研究科では、博士前期課程の修士論文作成過程において２年次に２回の中間報告会を行い、修了年度の２月上旬に最終試験を行っている。博士後期課程の博士論文作成過程においては、３年次までに計２回の中間報告会、３年次に学位論文検討会を実施することとしている。最終試験については、修了年度の２月上旬に最終試験を実施している。

令和５年度の報告会及び最終試験は以下の内容にて実施された。

6-1　修士論文中間報告会・構想発表会

第１回修士論文及び博士論文中間報告会

日　　時：令和５年５月 24 日（水）博士前期課程 14:00～14:30

場　　所：埼玉学園大学３号館　501 教室

【第１回修士論文中間報告会】（1 人当たり発表 20 分、質疑応答 10 分）

時間	発表者	指導教員名
14:00～14:30	22MB0001 有岡　奈々	一戸　真子

第２回修士論文中間報告会

日　　時：令和５年 11 月 29 日（水）博士前期課程 13:00～13:30

場　　所：埼玉学園大学３号館 501 教室

【第２回修士論文中間報告会】（1 人当たり発表 20 分、質疑応答 10 分）

時　間	発表者	指導教員
13:00～13:30	22MB0001 有岡　奈々	一戸　真子

6-2　学位論文発表会及び最終試験

日　　時：令和６年２月６日（火）　10：00～10:20

場　　所：埼玉学園大学３号館　202 教室・小会議室

【修士論文発表テーマ】（1 人当たり発表 20 分）

学生番号・氏名	指導教員名	研究テーマ
22MB0001 有岡　奈々	一戸　真子	わが国の電力産業における環境保全活動に関する研究

【学位論文発表会及び最終試験】（博士前期課程）

	学位論文審査 （審査委員のみで実施）	修士論文発表会	最終試験 （審査委員会ごとに口頭試問を実施）
	小会議室	202 教室	小会議室
22MB0001 有岡　奈々	9：30～9：40	10：00～10：20	10：40～11：00

7　おわりに

15 年目となる令和５年度は、４名の博士前期課程の入学者（学内選抜１名）を本学研究科のアドミッション・ポリシーに基づき受け入れた。また、本学研究科在籍院生に対し、博士前期課程においては、カリキュラム・ポリシーに基づき、専任及び客員教員等併せて 23 名体制で質の高い教育および研究指導が行われた。

また、論文指導においては、２回の中間報告会および最終試験が、本研究科ディプロマ・ポリシーに沿って遂行され、第 14 期博士前期課程修了生１名を輩出することができた。発表後には院生による中間報告会の振り返りも実施された。

更に、教員の資質の向上および教員間の教育および研究交流、院生と教員との活発なコミュニケーション等を目指し、研究発表会および意見交換会が例年通り実施された。また、教員個々による授業報告の実施により、より一層、教育内容の質の改善に向けた点検を行うことが出来た。

引き続き、次年度に向け、教員の教育・研究能力の向上を目指し、更なる FD 活動を展開していく所存である。

参考資料１

埼玉学園大学大学院FD委員会規程

平成22年 5月12日制定

（目的及び設置）

第 1 条　本大学院に、授業内容及び教育方法を改善し、その質的充実を図るとともに、教員の教育力の向上に資すること（Faculty Development。以下「ＦＤ」という。）を目的とし、ＦＤ委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第 2 条　委員会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について組織的な推進を図ることを任務とする。

⑴　ＦＤ活動の企画立案に関すること

⑵　ＦＤ活動に関する情報収集及び提供に関すること

⑶　ＦＤ活動についての評価及び報告書の作成に関すること

⑷　学長の諮問した事項に関すること

⑸　その他大学院のＦＤの推進に関すること

（組　織）

第 3 条　委員会は、次の委員をもって組織する。

⑴　研究科長

⑵　専攻主任

⑶　専任教員のうち、研究科委員会より選出された教員　若干名

（任　期）

第 4 条　委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第 5 条　委員会に委員長を置き、委員長は研究科委員会の議を経て、学長が指名する。

2　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3　委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

（会　議）

第 6 条　会議は、過半数の委員の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

2　議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（委員以外の者の出席）

第 7 条　委員会は、必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

（事　務）

第 8 条　委員会の事務は、事務局教務課において処理する。

附　則

1　この規程は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

2　この規程施行後、最初に就任する委員の任期は、第 4 条の規定にかかわらず平成 23 年 3 月 31 日までとする。

参考資料２

令和〇年〇月〇日

大学院経営学研究科
　授業担当教員　各位

大学院経営学研究科
　ＦＤ委員長　一戸 真子

学生向け授業に関するアンケート実施のお願い

　埼玉学園大学大学院経営学研究科の授業につきましては、日頃より格別のご指導、ご配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。
　令和〇年度〇期の授業アンケートを下記のとおり実施することとなりました。
　つきましては、アンケート実施の趣旨をご理解いただき、実施していただきたく、ここにお願い申し上げます。
　ご負担をおかけいたしますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

記

１．実施期間　令和〇年〇月〇日～令和〇年〇月〇日

２．対象授業　講義科目、研究指導科目

３．実施・回収
・アンケートの実施科目は、履修者が２名以上の講義科目及び研究指導科目を対象とする。
・担当教員は所定のアンケート用紙（人数分）及び回収袋（1 袋）を授業終了前の 10～20 分に配布する。
・担当教員は回収袋にあらかじめ実施日・授業担当者を記入する。
・アンケート実施後、学生自身がアンケートを回収袋に直接入れ、最後の学生に封をするよう指示をする。
・封をした学生に教務課へ提出するよう指示をする。

４．授業アンケート結果の活用
　授業アンケートは集計し、ＦＤ活動報告書に掲載する。

以上

参考資料３

令和〇年度

授業についてのアンケート（講義科目、研究指導科目）

科目名（　　）
教員名（　　）
月　　日　　曜日　　時限実施
※上記、記載漏れがないようお願いします

大学院の授業の質的向上のために、アンケート調査を行います。下記質問について、自由に記述してください。なお、このアンケートが成績評価に影響することは一切ありません。

１．この授業を履修した理由は何ですか？
２．この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか？
３．全体的に振り返って、授業には満足できましたか。
４．この授業について、要望があれば記入してください。

ご協力ありがとうございました。

参考資料４

教員の授業報告

経 営 学 研 究 科
職　名
氏　名

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 （実施科目のみ記載）	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)

参考資料５

中間報告会の振り返り

埼玉学園大学大学院　経営学研究科

学生番号	氏名	指導教員名
中間報告会までの準備を振り返ってどのような点が反省点としてあげられますか		
論文指導についての意見は何かありますか		
中間報告会での各教員からのアドバイスは、今後の論文作成において、どのように参考になりましたか。		

※書ききれない場合は、行数を増やしていただいて構いません。